

## Ⅱ. 実践研究の経過と成果

### 1. 実践研究の経過

#### (1) 中心グループによる研究経過

4月14日 江教研 第一次研究協議会

研究計画の概要確認、授業者決定など

7月14日 第1回 低学年ブロック研究授業・研究協議

7月20日 第1回 高学年ブロック研究授業・研究協議

8月24日 第2回 高学年ブロック研究授業・研究協議

8月25日 第2回 低学年ブロック研究授業・研究協議

8月29日 第3回 低学年ブロック研究授業・研究協議

9月7日 江教研 第二次研究協議会

石教研専門部会 第二次研究協議会への指導案交流・役割分担確認

9月28日 第4回 高学年ブロック研究授業・研究協議

10月3日 第4回 低学年ブロック研究授業・研究協議

10月12日 石教研専門部会 第二次研究協議会の事前研修会

10月13日 石教研専門部会 第二次研究協議会

2月9日 江教研 第三次研究協議会

研究の成果・課題・次年度研究計画について

#### (2) 中心グループでの研究成果

##### 【成果】

<低プロ>

・被加数分解に統一して繰り上がりのあるたし算の仕方を考えさせたことで、子どもたちも混乱せずにできた。既習の加数分解の問題をあらかじめ電子黒板で提示したことで、今までの問題と違うことを意識して全体検討もできた。また、ブロックで10のまとまりを作ることもわかりやすかった。

<高プロ>

・実際の学校にある物を活用し問題提示を工夫したことや、計算しやすい数値に調整したことで、学習意欲の喚起につながった。また、「比の言葉カード」を活用したことで、比の対応関係を捉えられるようになった。

##### 【課題】

<低プロ>

・問題提示の方法はわかりやすかったが、上位の子どもにとっては見通しが立ちすぎた部分もあった。  
・計算の方法に焦点化した場合、多様な考えが出づらく、どの方法を選択していくか選ぶことのないグループもあり、問題作りの工夫も必要だった。

<高プロ>

・課題をつかむ場面で、子どもたちに与える情報量をいかに精選していくかをあらかじめ考えておかなければならない。提示された情報の中から何を使えばよいのか戸惑う場面も多々見られた。  
・グループ交流は答えを求める活動に偏る傾向が見られた。“等しい比を作る際の根拠”を伝え合うようにさせるなど、明確な観点を持たせてグループの話し合いに取り組みさせる必要があった。

(文責 山口 広宣)